

えちごトキめき鉄道殺人事件

西村京太郎

Kyotaro Nishimura

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章	泊行き普通列車	7
第二章	合同捜査	36
第三章	ある七十歳	62
第四章	政治と殺人と	86
第五章	奇妙な京都旅行	115
第六章	黒い五分間の謎	144
第七章	逆転の法則	174

えちごトキめき鉄道殺人事件

第一章 泊行き普通列車

1

私は、旅が好きだ。それも、鉄道の旅が好きだ。だからといって、とても鉄道マニアといえそうもない。せいぜい、鉄道ファンぐらいか。

三十六人のグループで、自分たちで、旅の雑誌を出している。

まあ、同人雑誌といったところで、それに、勝手に旅の感想を載せたりするのだが、私は、最近、各地の鉄道で、愛称を付けることが流行

しているのを感じていた。

先月も一人で四国を旅したのだが、予讃線の一部に愛称が付いていた。「愛ある伊予灘線」という愛称である。

私は、あの辺りは好きなのだがなぜ、突然愛称が付いたのか、わからなかった。

そういえば、愛称が多いのは東北だろう。東北も好きでグループで鉄道旅行をしたり、一人で行き当たりばつたりの旅をしたりするのだが、とにかく東北は、愛称の宝庫である。磐越西線には「森と水とロマンの鉄道」という愛称が付いている。それに対して磐越東線の方は「ゆうゆうあぶくまライン」である。

陸羽東線は「奥の細道湯けむりライン」、大船渡線は「ドラゴンレール大船渡線」、男鹿線は「男鹿なまはげライン」、釜石線は「銀河ド

リムライン釜石線はちのへせん、八戸線はちまんたいは「うみねこレール」、花輪線はなわぜんは「十和田八幡平四季彩ライン」、大湊線おおみなとせんは「はまなすベイライン大湊線」。

愛称の大売り出しというか、愛称の付いていない鉄道路線は、一つも無いのではないかと、そんな気もしてくる。

今回私は、日本海側の鉄道に乗ってみたいとなつて、これから直江津なおえつに行く。直江津を出発点として、「えちごトキめき鉄道」に乗るのである。

実際の名称は「えちごトキめき鉄道」のあとに、「日本海ひすいライン」と続くのである。「えちご」という名称はあの辺りが昔、越後という地名だったし、越後線という名前が、今もあるからよくわかるのだが、「トキめき」鉄道というのがよくわからない。わからないから、とにかく乗ってみる事にした。果して、胸がときめ

くのか。

「雪月花」というリゾート列車も走っているが、私が乗るのは、普通列車である。

私は、三月十二日に直江津のホテルで一泊し、翌日の十三日に「えちごトキめき鉄道」の9時45分発の一両編成普通列車に乗る事にした。幸い、雪の気配は無く、日本海沿岸でも、ようやく春の兆しが見えてきた気候だった。

直江津に着いてから私は、えちごトキめき鉄道が、これから私が乗ろうとする、日本海側沿いの金沢方面に向かうルートもあれば、長野方面へ向かう「妙高はねうまライン」もあると知った。

私が乗る日本海沿いのえちごトキめき鉄道に「日本海ひすいライン」という名前が付いているのは、日本海側沿岸の海岸などで翡翠がよく

採れたからだろう。

一両編成だが、ET122形と呼ばれる、このルート専用建造し、使用しているツートンカラーの洒落た感じの車両だった。乗客はあまり乗っていないかった。目で数えられる位の乗客である。数えてみると、私を含めて十一人の乗客だった。

9時45分に発車した。頭上には、架線が張っている。つまり、電化されているのである。それなのに、私が乗った車両はディーゼル車だった。なぜ電化されているのにディーゼル車なのか。それはすぐわかった。

この、えちごトキめき鉄道は電化されているが、直流区間と、交流区間があり、その両方を走れる車両が無いので、ディーゼル車を使っているということらしい。面白いが、無駄遣いによ

うな気もする。

それでも、列車が走り出すと私は車外の景色に見とれた。線路に沿って人家が続いている。それも、分厚い感じではなくて、線路に沿ってまるで、一列縦隊の様な人家の重なりようである。集落の感じが薄いのだ。これが日本海の鉄道であり、集落であると感じた。

録音された車内アナウンスが流れた。

「この列車は、泊^{とまり}行きのワンマンカーです。お乗りになりましたら、整理券をお取り下さい」

これは、普通のアナウンスだが、次は、ちょっと面白い。

「この列車のドアは、自動ではございません。ドアの横にあるボタンを押して、お待ち下さい」

と、アナウンスされる。

東京生れで、東京育ちの私は、初めて、東北に旅した時、最初の失敗は、列車のドアだった。その頃は、丁寧なアナウンスが無かったので、ドアは、自然に開くものだと思っていた。

だから、ホームで列車を待っていて、列車が来たので、ドアの前に立っていた。開くのを待っていたのである。ところが、開かない。開かないまま、私をホームに残して、発車してしまったのである。

私は、あわてたが、同時に腹も立った。乗ろうとする私を無視して、ドアを閉めたまま、出発してしまったと思ったからである。

そのあとで、東北の友人に聞いて、ドアの開かないことも知ったし、その理由にも納得した。駅に到着する度に、ドアが開いていたのでは、

せつかくの車内暖房が逃げてしまう。それで、ボタンを押さないとドアが開かない。そんな風になっているといわれて、納得したのだ。今は、たった一両編成の普通列車でも、車内アナウンスでドアについての注意をしている所をみれば、都会から来る観光客は、ドアの開閉で戸惑うことが多かったのだろう。

それにしても、平坦な静かな景色である。それを楽しんでいると、突然、列車はトンネルに入った。反響音が強い。長いトンネルに見えた。しかし、閉塞感はない。古いトンネルらしく、全体が大きく出来ていたからである。それに、トンネル内も復線だった。

トンネルが終わって、外に出るとすぐ次の駅、谷浜^{たにはま}だった。無人駅だが、ホームはゆったりと長い。ホームだけ見ていれば、大きな駅である。

それにトンネルの大きさ。私は納得した。えちごトキめき鉄道といっているが、元は北陸本線の線路であり、ホームだったのである。全てが大きいのは当たり前である。

すぐ、列車は発車する。また同じ様な車内アナウンス。

「この列車は、泊行きのワンマンカーです。ドアは自動ドアではありませんから、ドアの側に付いているボタンを押して、お待ち下さい。お乗りになった方は整理券をお取り下さい」

しかし、この駅で乗った者は誰もいなかった。降りた人もいない。

列車はまたトンネルに入る。今度は短いトンネルだった。出るとすぐ、またホーム。有間川ありまがわ駅だ。このホームも長くて大きい。一両編成なので、ホームの一番端の所で止まった。

次は、名立なだちという駅になる。そこへ向かって走り出すと、すぐトンネルに入った。今度は、長いトンネルである。トンネルの中を走っている時に、

「次は名立です」

というアナウンスがあった。トンネルが長いせいか、出口が近付くと、やたらに眩しかった。名立に到着。止まっている時に、前方を見ると、次のトンネルの入口が見えた。発車するとすぐ、そのトンネルに吸い込まれた。相変わらずゆったりとした広さのトンネルである。ただ反響音が大きい。時々、運転手が警笛を鳴らす。その内に、トンネルの中で列車が停止した。筒石つついし駅である。

ここは、トンネルの中の駅なのだ。列車が止まった所に、駅員が一人立っていて、なぜか厳

しい目で車両を見ていた。ここでも、乗り降りする乗客はいない。

ここまでのトンネルは全て古くて、広くて、薄暗かったが、この筒石は駅の近くだけ蛍光灯が付いていて、それが青白く光っていた。

トンネルの中の駅から発車。次の能生駅までトンネルが続いている。筒石駅とはトンネルの続きだから、やたらに長く感じられる。トンネルだらけの鉄道は、えちごトキめき鉄道の駅というよりも、昔の北陸本線の駅とトンネルなのだろう。

やっと長いトンネルを抜けると、またすぐが駅である。能生駅を発車すると、

「次は浦本」

というアナウンス。途端にまた、トンネルに入った。こちらのトンネルは短いのだが、その

短いトンネルを抜けると、あっという間に次のトンネルに入る。トンネルを抜ける前にアナウンスがある。

「次は梶屋敷」

ここも、走り出すとすぐトンネルに入ったが、ここはすぐトンネルを抜けた。左手に北陸新幹線の高架が近付いて来て、しばらく並行して走った。新旧、極端な取り合わせである。

北陸新幹線の高架と並行して走っている間は、トンネルは無かった。何となく、トンネルが無いんだと思いつながら、窓の外の新幹線の高架を見ていた。

糸魚川駅に到着する。北陸新幹線が止まる駅である。私の乗った一両編成の普通列車が止まったホームは、低く、古めかしくて薄暗い。それに比べて、左側に見える新幹線の糸魚川駅は、

やたらに、大きくて明るい。

糸魚川を出ると、次は青海^{おうみ}。平地が広がりトンネルも無い。トンネルの無いのは並行して走る北陸新幹線の高架のせいのような気がしていたのだが、いつの間にかその高架は、消えてしまっていた。新幹線のレールが、こちらの線路から離れていったのである。

青海を出るとすぐに、またトンネルに入った。このトンネルは、今までのトンネルの様に、広くて大きくはない。小さいトンネルでトンネルの中のレールは一本だけ。そして、長いトンネルだった。

親不知^{おやしらす}駅^{いちはかり}を通して、市振^{いちばり}に着いた。持参した小型の時刻表を見ると、この市振までがえちごトキめき鉄道で、これから先は「あいの風とやま鉄道」となっている。別に降りて乗り換える

必要は無い。もともと同じ北陸本線だったのだ。

市振を出ると、次の駅まで小さなトンネルの連続である。やたらに車窓が、暗くなったり明るくなったりする。そして列車は、終点の泊に着いた。私の乗った一両編成普通列車の終点である。

私は、この先は列車を乗り換えて富山まで行き、富山市内で漢方薬を買って、東京に帰るつもりだった。

今まで乗って来た列車から降りようとした時、急に車内で、騒ぎが起きた。

運転手が何か大声で叫び、ホームの駅員を呼んでいるのだ。私も別に急用がある訳ではないから、車内へ引き返すと、駅員が運転手と前方の座席で騒いでいる。降りかけた乗客も、二、三人止まって、覗き込んでいた。私はその野次

馬たちに、

「何か、あつたんですか？」

と、きいてみた。返ってきたのは、

「乗客の一人が、気を失っているみたいなんですよ。それで、運転手と駅員が声を掛けています。ですが、反応が無いんです」

だった。

それでも列車は、このあと逆に、直江津に向かつて発車させなければならぬ。そこで、ぐったりとしている乗客を、車両から降ろしてホームのベンチまで、担いで行き、そこに寝かせている。野次馬の三人の乗客も、それを見守っていて、私も、気になったので覗いていた。

ベンチに寝かされた乗客は、年齢五十歳から六十歳ぐらいか。中肉中背のがっしりとした体つき。背広姿だが、ネクタイはしていなかった。

少しばかり、髪が薄くなっている。その姿は、

くたびれた中年サラリーマンという感じである。

しばらくすると、救急隊員がホームに入ってきて、担架にその男を乗せて、外に待っている救急車に運んで行った。私も、野次馬の三人も、何となくホッとした。それに向かつて駅員が、

「どうも、お騒がせしました」

2

私は、予定通りこの駅で列車を乗り換えて富山に向かった。泊から富山まで四十六分。

富山に着いた時は、私はもう、泊駅の騒ぎを忘れていた。

富山は、富山の菓売りの町である。今では、

ほとんど無くなっている漢方薬専門の店も何軒かあり、駅近くの食堂では、漢方薬を使った健康料理を並べていた。

漢方薬の入ったカレーライス。漢方薬を使ったラーメン。あらゆる料理に漢方薬が使われている。また、それを売りに行っている感じのメニューだった。薬膳料理である。私は、漢方薬を使ったカレーライスを食べた。味がちよつと違っていたが、別に不味^{まず}くはない。

そこで昼食をとつてから、私は市内にある大きな、漢方薬の店に入った。私は、ここに来る前に雑誌で、

「西洋医学の医者が薦める漢方薬」

という記事を見ていた。私は別に、病气持ちではないが、何となく昔から漢方薬に憧れていた^{ので}、それをノートに書き留めて持って来て

いた。

市内の大きな漢方薬の店で、四つの漢方薬を買い込んだ。そのあと、富山から北陸新幹線で、東京に帰る事にした。

旅行は好きだが、サラリーマンである。楽しい旅行で、会社を休む訳にもいかなかったのだ。翌日の新聞に、えちごトキめき鉄道の泊での事件が載っていた。私は終点の泊駅で、乗客の一人が救急車で運ばれていくのを見たが、あの乗客は病院に着いてからすぐ、死亡したというニュースだった。乗客の名前は、新井健一、五十歳。東京世田谷のマンション住まい。現在、独身。無職と出ていた。あの事件というか、事故というのか、報道はそれだけだった。地方鉄道の駅で起きた事件だから小さな報道だったの^{だろう}。

私は、退屈なサラリーマン生活に戻ったのだが、「鉄道は友達」というタイトルの、自分たちだけの同人雑誌に、三月十三日の直江津から富山までの旅行を、十五枚に書いて載せる事にした。もちろん、原稿料はなしである。

最初は、えちごトキめき鉄道の乗車の楽しさを書くつもりだったが、半分は最後に泊駅で起きた事件を書く事になってしまった。それに、今月号の締め切りが迫っているという事だったので、徹夜で書いて送った。

一週間後に、今月の「鉄道は友達」が刷り上がって配られた。土曜日に送られてきたので、私は日曜日にどこにも行かず、自宅マンションで、寝転がりながら、自分の書いた物を読んでいた。

午後三時過ぎに突然、ベルが鳴った。誰が来

るといふ予定も無かったので、私は首を傾げながら玄関のドアを開けた。

そこに、二人の男が立っていた。四十代のがつしりとした体つきの男である。

「木村文彦さんですね？」

と、一人が確かめるようにきき、私が頷くと二人はポケットから警察手帳を出して、私に示した。

「私は、警視庁捜査一課の警部で、十津川。こちらは、同じく警視庁捜査一課の亀井刑事です」

と、いった。

私は驚くと同時に、

(ああ、これが刑事なのか)

と、興味も持った。その刑事二人がなぜ私を訪ねて来たのか、全く見当がつかなかった。す

ると、年上と見える亀井刑事の方が私たちの雑誌「鉄道は友達」を見せた。

「ここに、木村さんは三月十三日に『えちごトキめき鉄道』に乗った記事を書いていらっしやいますね。この記事、本当にあなたが実際に乗って書かれたんですか？」

ときいた。

「もちろんそうですが、それがどうかしましたか？」

「是非、伺いたいことがあるんですよ。とにかく、中に入れて下さい」

と、もう一人が、いった。

私は、毎日朝と夕方に飲んでいるコーヒーを、二人の刑事にも勧めてから、自分も一口飲んだ。

そのあとで、

「何の御用で来たんですか？」

改めて二人にきいてみた。

「あなたは、三月十三日、直江津9時45分発の普通列車に乗った。そして終点の泊で降りた。

その時、同じ車両に乗っていた乗客の一人が、倒れているのを見つけた？」

「いや、見つけたのは私じゃありません。運転士ですよ。運転士さんが駅員を呼んだりして騒いでいるので、何だろうと思つてのぞいたんです。そうしたら、乗客の一人が倒れていて、駅員が、救急車を呼んで運んでいったんです。それだけです。後で新聞で、その乗客が死んだ事や、新井健一という名前も知つて、それを、私たちの雑誌に書いたんです。それだけです」

と、私はいった。

「正直に打ち明けますが、あの時亡くなった新井健一は警視庁の刑事でした」

「しかし、新聞には、無職と出ていましたよ」

「一年前に辞めているので、正確にいえば無職ですが、我々としては警視庁の刑事として考えられています」

十津川という警部が、いった。

「それで、私に何の御用ですか？」

「あなたが書かれた物を読むと、その時列車に乗っていたのは十一人だと書かれていた。それが全部直江津で乗って、終点の泊まで乗っていたと、そう書かれています」

「そうです。その間の駅で、乗り降りはありませんでした」

私が、いった。

「始発の直江津で何時に乘られたんですか」

と、きく。私は手帳を見て、

「9時45分です」

「終点に着いた時は」

「時刻表通りですから、11時3分です」

「そうすると、その間一時間二十分ですね」

「だいたいそうだと思います」

答えながら、この刑事が、何を知りたいのか、わからなかった。

「その間、あなたは他の乗客と同じ車両の中にいた」

「当たり前でしょう。一両編成ですから」

「駅の数はいくつでしたか？」

「直江津と泊を数えれば、十四です」

「その間、乗り降りは無かったです」

「そうですよ。さっき言いました」

「そうすると、あなたを含めて乗客は十一人。」

その十一人は一時間二十分の間、同じ車両にいた？」

「そうです」

「その間、車内を歩いたりしましたか？」

「もちろん、しましたよ。初めての車両ですから」

「そうすると、他の十人の乗客と何か会話をしましたか？」

「いや、しません」

「死んだ新井健一とはどうですか？ 話をしましたか」

「しませんが、簡単な挨拶はしたと思いますね。いわば同じ車両に、一時間二十分も乗っていたんですから。ただし、会話はしていません」

「新井健一が、他の乗客と話をしているのは見えますか？」

「どうでしたかね。とにかく、漠然と車内を見て回って歩いただけですから、誰と誰が話をし

ているとか、そういう事は覚えていないんです」

と、私はいった。

「死んだ新井健一が車内で誰と話をしていたか、どんな乗客と話をしていたか、それを是非知りたいんです。何とか思い出して下さい」

と、十津川が、いった。やたらに、くどい。

「よく覚えていないんですよ。私は別に、亡くなった方の知り合いじゃないし、他の乗客たちと同じ様に、ぼんやりと見ていましたからね。どんな人と話をしていたか、覚えていないんです。それにしても、どんな理由があつて、私に、亡くなった新井健一さんという乗客の事を聞きにいらっしやっただんですか？」

私は逆に、きいてみた。

「いや、それは、教えられません」

と、いうのが二人の刑事の返事だった。

「でも、調べているんでしょう？」

「その通りですが、何とかして、新井健一がどんな乗客と話をしていたか、是非思い出して頂きたいんですが」

と、繰り返す。

「それは無理ですよ」

と、私はいった。

「今も言った様に、この乗客一人を気にして乗っていた訳じゃありませんから」

二人の刑事は、これで私に会う理由は無くなった、といった顔で腰を上げた。そこで私は、いつてみた。

「私が、何か知っていたら、警察がどんな事件を追っているのか、教えて頂けますか？」

そのとたん、二人の刑事は、座り直して、

「どんな事を知っているんですか？」

「いや、知っていると云うんじゃないくて」

「それならば、話を聞いても仕方がない」

と、いった。そこで私は、いつてやった。

「実は、小さいカメラを持って乗り、車内の写真は何枚か撮とっているんですよ。どうですか。

それに、この新井さんが写っているかはわかりません。意識して車内を撮とった訳ではないからしかし、写っているかもしれない。その写真を見せたら、今警察がどんな事件を追っているか、新井さんがどうして死んだのか、それを教えてもらえますか？」

と、きいてみた。

二人の刑事は、顔を、見合せてから、「とにかく、あなたが撮とった写真を見せてくれませんか」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。